やまなし歴史探訪④

時を今につなぐあの日

写真提供：山梨日日新聞社発行「山梨百年」より

昭和39年(1964)4月1日、
富士山有料道路（富士スバルライン）が開通した。

経済成長著しい、東京オリンピックが開かれたこの年、車社会の波は、富士山五合目にまで到達した。

「県が二年半の時日と十七億円を投じた富士山有料道路＝愛称・スバルライン（二十九、五キロ）の完工式は、二十七日午前十時すぎから高松宮ご夫妻をお迎えし関係者八百余人が河口湖町の現地料金徴収所前に集って行われた。この日、富士は美しい姿をくっきりと見せた。・・・・・ご夫妻を先頭に自動車二百台が五合目までパレード。将来のモグラケーブルにつながる有料道路は名実とも日本最長の登山有料道路としてスタートした。」

（昭和39年（1964）5月28日付け山梨日日新聞）

日本一の山・富士山の五合目（標高2,305メートル）まで車に乗ったまま登ることができれば、観光の大きな目玉になる。画期的な登山自動車道が、県営第1号の有料道路として着工されたのは、昭和36年（1961）。開通した昭和39年（1964）の秋には、あの東京オリンピックが開催された。今から四十数年前、戦後復興からやがて高度経済成長を達成する時代とはいえ、まだ自家用車は大衆の憧れであった。中央自動車道や河口湖大橋の開通に先立ち、車社会の到来を実感させ、富士山を、そして山梨を大きく観光のメッカに押し上げたのが、この「富士スバルライン」の開通であった。

観光の新時代を拓いた、富士スバルライン

完工式の当日は、確かにすばらしい五月晴れの好天に恵まれたのだろう。祝賀を報じる新聞各紙は、くっきりと浮かび上がる富士山とともに、一斉に晴れがましい完工式の模様を伝えている。

「道路の完工によって清らかな富士は国民の山になった」と、高松宮殿下がお祝いの言葉を述べられ、同妃殿下がテープにハサミを入れられた。ご夫妻を乗せた車を先頭に五合目までパレード。大相撲の人気力士、出羽一門の佐田の山、北の富士などの関取も加わり、当時人気の小型オープンカーに乗った大きな力士の姿が、祝賀ムードに花を添えた。

霊峰富士は古来信仰の山、富士講の隆盛で江戸庶民にも憧れの山であった。しかし観光旅行がブームになる時代になっても、訪れる客は麓からその勇姿を眺めるだけで、まだ気軽に登れる山ではなかった。ヨーロッパ・アルプスのユングフラウの登山電車のように、もっと身近なものにする手だてはないものか。富士スバルラインは、観光山梨の目玉に、そして富士北麓の観光開発の原動力にと、早くから構想されていた。

人跡未踏の富士山の原生林を切り開き、標高856メートルの料金所付近から標高2305メートルの五合目まで、標高差千数百メートルの荒れた山肌に道路を建設することは、その後も続くメンテナンスを考えても、技術的に難工事であったことは間違いない。工事は荒れた溶岩に掘削を阻まれ、零下30度の酷寒にも耐えねばならなかった。しかし、着工からわずか二年半の昭和39年(1964)4月1日に開通。そして、日本最長の登山有料道路は完工式を迎えた。

富士スバルラインは、山梨に観光の新時代の到来をもたらした。当時の天野久知事の「富士山を日本の観光の象徴に」との意気込みは、多くの県民の願いでもあった。料金所付近が渋滞するほど、多くの観光バスが五合目を目指し、「県内観光白書」では、開通したこの年の富士山・富士五湖地域の集客は前年の三・三倍に増えたと伝えている。

昭和39年5月27日、高松宮ご夫妻をお迎えして完工式が盛大に行われた。
写真提供：山梨日日新聞社発行「山梨百年」より

首都圏と直結した、高速自動車道の時代へ

真っ白い一本の線が、富士山を登って行く。裾野から亜高山帯へ、そして高山帯へ。スギの原生林は二合目あたりからシラカバ林に変わり、三合目から上になると、シラベ、ツガ、シャクナゲが目につき始め、やがてハイマツもまばらな五合目。その五合目の小御嶽神社からさらに徒歩で山頂を目指す。かつて講を組んで登拝した富士山も、五合目までなら料金所から車で一時間もかからない。しかも普段着のままで登れる。多くの人がスバルライン沿いの景観を当り前に楽しむことができるようになった。

富士スバルラインの開通が急がれたのは時代の要請でもあった。秋の東京オリンピック開催を目前に、同年9月には名神高速道路が開通、10月になると東海道新幹線が営業を開始。山梨への観光客誘致の気運はなお高まり、オリンピックに訪れる外国人観光客用の英文パンフレットが用意されるなど受け入れにも万全の態勢が整えられた。やがて昭和44年(1969)には、富士北麓と都心を直結する中央自動車道・富士吉田線が開通した。続く昭和46年(1971)には、河口湖大橋が完成。そして昭和57年(1982)には、中央自動車道・調布～小牧間が全線開通し、山梨県も高速ハイウエー時代に突入した。東京圏と直結した山梨に、今や多くの外国人観光客が訪れる。富士スバルラインは、今日に続く「観光山梨」の大きな礎となった。

現在、富士山の世界文化遺産登録を目指し、着々と準備が進められている。かつての信仰の山は、豊かな自然環境とさまざまな歴史文化で訪れる人々を楽しませてくれる。

ふもとから五合目へと続く富士山有料道路（富士スバルライン）

記事監修：山梨大学人間教育科学部　教授　齋藤康彦